

第 37 期 日本ロシア学生交流会

関東本部 報告書



2024 年度幹事長挨拶

日本ロシア学生交流会 2024 年度 幹事長

東京外国語大学 4 年 有働 榛人

2024 年度、日本ロシア学生交流会の代表を務めさせていただきました有働榛人と申します。今年度の活動を以下にご報告申し上げます。

今年でウクライナ侵攻から 3 年が経ちますが、いまだに解決までの道筋は見えず、日露関係も停滞しています。そのような状況の中、我々のサークルも活動の縮小を余儀なくされ、コロナ以前のような大規模な企画を実施することは叶いませんでした。しかしながら、そのような時だからこそ、ロシア事象に関心を持つ学生たちに少しでも活躍の場、そしてロシアを知る機会を提供したいという思いのもと、今年度の活動を進めてまいりました。

今年度の特筆すべき点としては、外部と連携しながら、ロシア人との交流機会を積極的に設けたことが挙げられます。オンラインではモスクワ市立大学、カザン連邦大学、リャザン大学の学生の方々との交流を実施しました。対面では、東京のアレクサンドルネフスキー聖堂への訪問や、日本で学ぶロシア人学生との交流の機会を設けることができました。ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

また運営面では、Notion というワークスペースアプリを活用し、運営の効率化と情報の可視化を図りました。Notion 導入の利点は 2 点あります。第一に、作成したページを瞬時に共有できる点、第二に、クラウド上で会の情報を一元管理できる点です。従来は、年度ごとの情報共有や引継ぎがうまくいかず、毎年幹部が苦勞するという課題がありました。また、1 年を通して幹部内での情報共有が疎かになっている問題もありました。そこで今年度は可能な限りの情報を Notion に集約し、次年度以降もスムーズな運営ができるよう努めました。今後も引き続き活用していただければ幸いです。

弊会はもともと日露間の派遣事業を目的として設立された団体です。そのため、理想としては派遣事業の復活を目指すべきだと考えております。しかし、現状ではそれを実現することは非常に困難です。このような状況の中、今年度は「日本ロシア学生交流会の今あるべき姿とは何か」を模索する 1 年となりました。活動の規模が小さい中で、果たして意味があるのかと迷うこともありました。それでも、1 年を振り返ってみて、ロシア事象に関心を持つ日本人学生に、少しでも学びと交流の機会を提供し続けることこそが、いま私たちにできる最善の道であり、弊会の存在意義であると感じています。これはまた、日露の未来へ繋がる大切な一歩だと信じています。いつか情勢が改善されたときには、再び派遣事業を復活させ、学生の力で日露の文化交流の風を起こせるよう、今後も努力を重ねていきたいです。

以上をもって、2024 年度の活動報告とさせていただきます。今年度弊会の活動に協力して下さった方々に、2024 年度幹事団一同、心より感謝申し上げます。

2025 年 3 月 31 日

目次

第一章	日本ロシア学生交流会について	1
1-1.	弊会の沿革.....	1
1-2.	関東本部及び会員構成について.....	3
1-3.	これまでの訪日・訪ロ企画.....	3
第二章	2024年度の活動について.....	5
2-1.	年間活動記録.....	5
2-2.	年間収支報告.....	6

第一章 日本ロシア学生交流会について

1-1. 弊会の沿革

1989年、東欧革命により現地への渡航もままならない中、ソ連に赴き、現地で同世代の学生たちと直接ひざを付き合わせて語り合おうと考えた学生有志により、同年6月に弊会の前身となる「日ソ学生交流会」が設立されました。当時はソ連に関する正確な報道も少なく、絶対的な情報量が不足していましたが、得られた僅かな情報を元にして毎週のように「ソ連とは、新生ロシアとは何か」と熱い議論を交わしていました。初期の2年間は、首都モスクワを訪問し、とにかく現地の学生との対話をしようという意気込みの元に活動していましたが、やがてソ連・ロシア激動の時代で交流先を見つけることすら困難となりました。

そのような中、財団からの助成金が一時打ち切れ、やむなく自費でモスクワへの渡航が2度実施されました。格安航空券の無いこの時代に「学生が自費で」渡航するのに必要な資金集めに際しては、想像を絶する苦労があったと伺っております。しかし、それでも1994年、会員のカンパによって第1回訪日企画が敢行され、モスクワから1名の学生を招致することができました。

翌年の1995年は、ロシア第3の都市、ノヴォシビルスク市の学生と新たに定期的な交流事業が開始されることとなり、弊会は大きな転機を迎えました。当時顧問を務めてくださった和田氏とフロロヴァ女史との出会いから始まる交流により、主にノヴォシビルスク国立大学東洋学部との交流を継続的に実施し、第1回ノヴォシビルスク訪問事業が実行されました。1996・97年には、日本の家庭を知ってもらうことを目的としたロシア人のホームステイ企画を本格的に始めました。

1998年からは、それまで2期に渡って同年中に行なっていた訪日・訪ロ企画について、主に財政的理由からそれぞれ隔年開催とすることと致しました。1999年には、新しい試みとしてモスクワへの再訪問を行い、現地の学生と交流しました。

2001年の夏より、現在も続くモスクワ郊外の街、リャザンとの交流が開始されました。1995年より続くノヴォシビルスクとの交流も現地メンバーが大きく入れ替わり、活動はより一層充実してまいりました。2009年には、創立20周年を迎え、この間に弊会からは社会で広く活躍する人材を多数輩出しています。

2011年の春には、大阪大学・同志社大学の学生を主な会員とし、関西本部を設立しました。この年は、1997年を最後に途絶えていた訪日・訪ロ企画の同年開催を14年ぶりに果たす運びとなり、翌年には、関東関西2本部体制の中で4都市間同時交流という試みを始めました。

2013年には、外部の方々を招いての斬新かつ大規模な企画を皮切りに、北方四島学生交流企画への参加など多岐に渡って活動が実施されました。2014年の活動では、新たなイベントとして、東京大学の学園祭である「駒場祭」に出店し、弊会について一般の人に広く知ってもらうきっかけとなりました。2015・16年には、会員数が増加し、様々な大学から会員が集まるようになり、活動に活気が生まれました。

2017年は、前年に天候不順によりやむなく中止した北方領土への訪問を果たしました。更には、2013年度に開催された「日ロ学生シンポジウム」を、ロシア関連分野就職シンポジウム「ミチター」と名前を改め再開する運びとなったことに加え、東京大学のもう1つの文化祭である「五月祭」へも出店しました。また、関西本部が「セーミチキ」として名を改め、別組織として独立し、姉妹団体としての交流は現在も続いております。

2018年は、北方領土に住むロシア人とのビザ無し交流、「五月祭」への出店、第2回シンポジウム「ミチター」を開催致しました。また、新たな試みとしてロシア料理会や、カザンとの交流を目的とした「カザン班」を設立し、活動しました。

2019年も前年同様にシンポジウム「ミチター」をはじめ、ロシア語教室や料理会、バラライカ教室などを開催しました。

2020年2月には、東京・芝公園にて日本初のロシア・ユーラシア文化祭「プラーズニク」を開催しました。著名人の方をお招きしたトークショーや、舞踏、演奏の催し物、グッズや食品の販売まで、イベント内容は多岐に渡り、多くのご来場者様に喜んでいただきました。しかし、開催直後に新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るい、予定していた訪日・訪ロ企画は中止に追い込まれ、活動を大幅に縮小せざるを得ない年となりました。このような状況の中でも、就職シンポジウム「ミチター」を4回目にして初となるオンライン開催に漕ぎつけました。

2021年、緊急事態宣言の発出が複数回に渡り続く中、パンデミックは終息の兆しを見せませんでした。しかし、弊会は全く新しい活動をしていきました。月2回のオンライン日ロ交流会をはじめ、月の約半分を活動日にあて、様々なイベントを開催し、日ロ間だけでなく会員同士の交流を絶やさず、むしろ加速させることを目標に活動しました。

2022年は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止に最大限配慮しつつ、対面イベントの拡充を図りました。その1つである文化交流講演会「文化の橋」では、ユーラシア地域の文化、風土、民族に精通する専門家の方をお招きし、ご講演を賜るなど、日ロ間の文化交流の促進に注力した活動を行いました。また、オンライン上の活動も絶やすことはなく、現在でもリヤザンやモスクワ、シベリアのロシア人学生との定期的なオンライン交流を続けています。

2024年、ウクライナ侵攻より3年が経過する中、いまだに解決への道筋は見え、日露関係も停滞したままとなっています。ロシアへの渡航が叶わない状況の中、弊会は「日本にいなからできる日露交流」を模索し国内でロシア人との接点を少しでも増やすことを目指して活動してまいりました。具体的には、ロシア人学生とのオンライン交流会や、ロシア正教会聖堂訪問、ロシア人との交流プログラムへの参加など、学生が直接異文化に触れ、対話を行う場をつくってまいりました。

1-2. 関東本部及び会員構成について

関東本部は、1989年に設立された「日ソ学生交流会」を前身として、現在に至るまでノヴォシビルスク・リャザンとの学生間交流を中心とした活動を行ってまいりました。近年では、訪日・訪ロ企画以外にも、北方領土を訪問するビザなし交流への参加、「駒場祭」や「早稲田祭」への出店など、活動は多岐に渡ります。ロシア語が専攻・第二外国語の学生に限らず、ロシアやその周辺地域への関心、学生交流への興味などが動機で入会する学生も多いです。

2021年以降は、活動の本格的なオンライン化に伴い、会員構成に大きな変化が生じました。かつての会員は、上智大学・東京外国語大学など、特定の大学の学部生が中心でしたが、オンラインでの活動を積極的に取り入れたことで、学校間の垣根を超えやすくなり、これまで以上に多くの大学から会員が集まるようになりました。

1-3. これまでの訪日・訪ロ企画

- 1989年6月 : 日ソ学生交流会結成
- 1990年8月 : 第1回訪ソ企画、日本人13名をモスクワへ派遣
- 1992年8月 : 第2回訪ソ企画、日本人13名をモスクワへ派遣
- 1993年7月 : 第3回訪ロ企画、日本人をモスクワ・極東へ派遣
- 1994年 : 第4回訪ロ企画、日本人をモスクワ・極東へ派遣
: 第1回訪日企画、ロシア人1名をモスクワから招致
- 1995年8月 : 第5回訪ロ企画、日本人7名をイルクーツク・ノヴォシビルスクへ派遣
- 1996年3月 : 第2回訪日企画、ロシア人学生8名・教師1名をノヴォシビルスクから招致
: 第6回訪ロ企画、日本人10名をイルクーツク・ノヴォシビルスクへ派遣
- 1997年3月 : 第3回訪日企画、ロシア人10名をノヴォシビルスクから招致
- 1997年8月 : 第7回訪ロ企画、日本人8名をノヴォシビルスクへ派遣
- 1998年8月 : 第4回訪日企画、ロシア人10名をノヴォシビルスクから招致
- 1999年8月 : 第8回訪ロ企画、日本人16名をモスクワ・ノヴォシビルスクへ派遣
- 2000年8月 : 第5回訪日企画、ロシア人9名をノヴォシビルスクから招致
- 2001年8月 : 第9回訪ロ企画、日本人10名をノヴォシビルスク・リャザンへ派遣
- 2002年8月 : 第6回訪日企画、ノヴォシビルスクから7名、リャザンから5名のロシア人を招致

第二章 2024年度の活動について

2-1. 年間活動記録

5月

5月26日 カザン連邦大学とのオンライン交流会

6月

6月2日 新入生歓迎料理会

6月18日 モスクワ市立大学とのオンライン交流会

6月24日 カザン連邦大学とのオンライン交流会

7月

7月6日 ウズベキスタン食事会

7月31日 カザン連邦大学とのオンライン交流会

8月

8月4日 カザン連邦大学とのオンライン交流会

8月9日 リャザン州立大学とのオンライン交流会

8月27日 カクテルパーティー

8月28日 アレクサンドルネフスキー聖堂訪問

9月

9月9日 中央アジア料理会

9月26日 勉強会

10月

10月5日 上智大学スヴェトラーナ先生 プーシキン特別講義

10月6日 同上

11月

11月30日 モスクワ市立大学とのオンライン交流会

ロシア人との交流プログラム

12月

12月22日 リャザン州立大学とのオンライン交流会

ロシア人との交流プログラム

2月

ロシア人との交流プログラム

2-2. 年間収支報告

収支報告書		報告期間：2024年4月1日～2025年3月31日	
収入の部			
項目	金額	合計金額	
前年度繰越金	230,439		
年会費	51,000		
収入合計		281,439	
支出の部			
項目	用途	金額	項目別合計金額
運営費	ホームページサーバー代	5,392	
	上智フレマン参加費	2,654	
	デザイン作成ツール (Canva)	8,260	
	印刷代	640	
	合計		
新歓(料理会①)	材料費	9,974	
	会場費	4,000	
	うち参加費	-7,500	
	合計		
食事会	飲食代	35,000	
	うち参加費	-28,000	
	合計		
聖堂訪問	謝礼金	10,000	
	合計		
料理会②	材料費	11,289	
	会場費	5,500	
	うち参加費	-4,000	
	合計		
料理会③	材料費	4,644	
	会場費	1,950	
	うち参加費	-4,500	
	合計		
勉強会	お菓子代	664	
	合計		
講演会	謝礼の品代	3,176	
	合計		
ロシア人との交流会	ロシア人へのお土産代	28,384	
	謝礼の品代	2,936	
	日本人参加者の交通費	16,600	
	雑費	920	
	合計		
次年度繰越金	次年度繰越金	173,456	
	合計		
支出合計			281,439